

「使いやすい NDC」は実現可能か

分類研究分科会

文教大学越谷図書館 藤倉 恵一

はじめに

前期（2008～2009 年度）の分類研究分科会では、日本図書館協会分類委員会（以下「分類委員会」）が現在改訂を進めている『日本十進分類法』（以下「NDC」）新訂 10 版（以下単に「10 版」という。他の NDC 諸版も同様）に向けた改訂試案の公表が開始されたことにあわせ、その検討と評価を行った¹⁾。

今期もそれを継承し、今会期中に公開された 2 つの試案および 9 版「解説」の精読を通じて、NDC の諸問題点を検討する。

1. 検討の経緯と概略

分科会では、NDC10 版に対して主に以下の内容を検討した。本稿では(3)に基づいて、特に重要な部分を中心に述べる。

- (1) 10 版試案の検討 (1.1～1.2 および 2 参照)
- (2) NDC9 版「解説」の検討 (1.3 および 3 参照)
- (3) 検討を通じた研究のまとめと、分類委員会への提言 (1.4 参照)

1.1 検討の対象とツール

前期の手法を踏襲し、公開された試案に対して、その妥当性や問題点、書架や他の分類項目への影響などを主な論点とした。

10 版試案はまず『図書館雑誌』に掲載されるが、そこでは紙幅の都合から原則として 4 ページ以内にまとめられている。その省略を補うために分類

委員会ホームページ²⁾において、より詳細な試案が HTML および PDF で公開されている。分科会では、このホームページに掲載された詳細版を直接の検討対象とした。本稿において「試案」とはこの詳細版を指すこととする。

NDC9 版は、過去 3 度にわたる補訂や誤植の修正などにより、刷によって版面が異なっている。そこで分科会共通の底本として「13 刷」（2008 年 5 月印刷）および「14 刷」（2010 年 6 月印刷）を使用した³⁾。

2011 年度夏期研究合宿においては、改訂試案が既存の出版物に及ぼす影響を推測するために『出版年鑑』（出版ニュース社）の 2011 年版および 10 年前にあたる 2001 年版をサンプルとして使用し、10 版試案がどの程度の分類変更を要するか実証実験を行った。

1.2 検討のプロセス

基本的な流れとして、各試案を読みながら変更点について妥当性や疑問などの意見を出し合うということを反復した。また、夏期研究合宿での実証実験を通じて、試案検討の裏付けを行った。この内容は 2 で詳述する。

1.3 9 版「解説」の精読と検討

今期はさらに、NDC9 版「本表編」に収録された「解説」を精読した。この内容は 3 で詳述する。

1.4 分類委員会への提言

1.4.1 前期研究にもとづく提言（総論）

前期の研究成果を整理し、2010年1月21日付「日本十進分類法新訂10版試案に対する意見」を分類委員会宛に提出した。その内容は主に以下のとおり。なお、詳細については前期報告を参照されたい。

- ・ 補遺の漸次発行
- ・ 関連索引および本体の電子化
- ・ 縮約項目および形式区分適用順序の再検討
- ・ 注記の文体統一および定義の再検討
- ・ 「人」の種類を扱う一般補助表の必要性
- ・ 図書館と関連主題のための固有補助表の設定
- ・ 情報科学 007 と情報（通信）工学 547/548 の統合の再考

これに対し、分類委員会から2010年3月9日付「日本十進分類法新訂10版試案に対する意見（回答）」を受理した。この回答は、上の指摘に対して以下のような趣旨であった。

- ・ 補遺の発行については、体制を検討したい
- ・ 電子化、注記の改善、情報科学・工学の統合の再考については、前向きに考えたい
- ・ その他の件については、参考意見とする

このうち「注記の見直し」については第32期第16回委員会（2010年8月10日）以降数度にわたり検討されており、また「情報科学・工学の統合」についても第33期第5回委員会（2011年8月9日）において再検討されている。

1.4.2 前期研究にもとづく提言（各論）

前項はNDC全体に対する総論に関するものであり、前期の研究対象とした各論試案の個別具体的問題点は、0類16項目、2類7項目、3類26項目、7類11項目に整理し、2010年3月31日付「日本十進分類法新訂10版試案に対する意見（各論について）」として提出した。

1.4.3 今期研究にもとづく提言

今期の研究成果を整理して、2012年2月1日付「日本十進分類法新訂10版試案に対する意見：1類・5類試案および9版「解説」について」を以下の項目にまとめ提出した。

- ・ 総論（要望事項）
- ・ 各論：1類6項目、5類12項目
- ・ 「解説」17項目および総論（要望事項）

1.5 分類委員会によるNDC検討の経緯

2010年2月時点までのNDC10版改訂の経緯・動向については、前期の報告を参照されたい⁴⁾。

以降、2012年2月時点までに1類・5類の2つの試案が公開されたが、2年のうちに4つの試案が公開された前期と比較すると公開のペースは遅いと言わざるを得ない。また、10版刊行予定日もいまだに公表されていない⁵⁾。

2. 各論試案に関する考察

本項では、各論の改訂試案に対する検討（各論部分）を中心に考察する。

2.1 1類 哲学

1類試案⁶⁾は、構造に関わる改訂はほとんどない。主な改訂は「146 臨床心理学」を展開細分したこと、「159 人生訓」の対象別区分を変更したこと、「199 ユダヤ教」をキリスト教に準じて細分したことである。

2.1.1 臨床心理学（146.8）の展開

146.8 カウンセリング. 精神療法 [心理療法]

- .81 各種の精神療法 [心理療法]
- .811 精神療法：ゲシュタルト療法，行動療法，交流分析，認知療法
- .812 集団精神療法：家族療法，サイコドラマ（心理劇療法） ……

試案では上のように展開されているが、下線で示したように「精神療法」が3段階で区分されて

いる。146.8 は精神療法〈一般〉に対するいわゆる包括的著作の分類であるが、各論は146.811以下であり、この中間に設けられた146.81「各種の精神療法」なる分類に収めうる著作は存在しない。

NDC が十進分類法である以上、区分肢の展開でやむを得ずこのような番号が生じることは不可避である。実際 NDC には 542.1, 619.1, 625.1, 626.1, 627.1 の 5 か所に「共通事項」という事実上の不使用項目（記載例：[.1 共通事項]）が存在している。

今回新設された 146.81 は「共通事項」と同一のものであるか否か。同一とすれば項目名の修正を要し、そうでないとすればなにを分類するかの注記や説明を要する（そもそも NDC の「解説」や凡例で「共通事項」について言及されていないことも問題である）。

2.1.2 「人」の時代・地域の取り扱い

日本思想に「121.7 昭和時代・平成時代」が新設された。これは区分上まったく問題ないが、出版年鑑を用いた実証実験で、複数の時代にわたって活躍した人物の取り扱いに問題があることが判明した。

そもそも NDC では、総則として人物の取り扱いを「生まれた時代」と「活躍した時代」のどちらかで分類すればよいかという基準が存在しない。「各類概説」9 類においてのみ人物の取り扱いとして、作家研究に関する特殊分類規程を設けている。しかし 9 類以外でも人物を取り扱う箇所は無数にあり、分類項目として人名が列挙されていない人物の取り扱いについては一般分類規程として定義が必要だということが浮き彫りになった。

なお、これは時代だけでなく地理的要素でも同様の問題がある。

2.2 5 類 技術

5 類試案⁷⁾は、PDF で 17 ページと多量に及ぶ（1 類試案は 6 ページ）。その理由のひとつとして、

字体や外来語表記の変更など（例：「車輛」→「車両」や「ブルドーザ」→「ブルドーザー」、「デジタル」→「デジタル」）にこの類以降の一定の方針を設け、それに準じて変更箇所を逐次記録したことも挙げられる。

5 類の変更点で大きなものは「519 環境問題」（9 版「公害」からの変更）、「546 電気鉄道」の廃止（「516 鉄道工学」および「536 車両工学」への移設）、「588 食品工業」の再編成などが挙げられる。

なお、547/548（通信工学・情報工学）については 0 類情報科学と並行して検討しているため 0 類試案と同様、今回も公表されていない。

2.2.1 作業上の迷いを減らす注記や手引き

「596 料理」は 9 版改訂時にさまざまな観点から料理を分類できるように、以下のように区分肢が設けられた。

- 596.2 様式別による料理法. 献立
- .3 材料別による料理法
- .4 季節・場所による料理

しかし区分肢を設けただけで優先順位を明らかにしなかったため、ここで交差分類が生じてしまった。例えば「海鮮中華料理」のように文献が「様式」と「材料」の両方を扱っている場合、どちらに分類すべきか、迷いが生じる⁸⁾。

10 版試案においては「材料と様式の両方に言及する場合は材料を優先する」という注記が新設され、一見するとこの問題は解決したかのように見える。だが、この注記に厳密に従うと「精進料理」は「日本料理の一様式」と同時に「野菜（植物性材料）を用いた料理」であるから、「材料を優先」され、「野菜料理」として分類されてしまう⁹⁾。

これを回避するために注記の趣旨を「様式と材料のどちらに重点を置いているか不明瞭な場合は、材料に分類する」とすれば優先順位が明らかになり、よって精進料理を扱った著作の大部分は自ずと日本料理に分類される。

また、「588 食品工業」では特に菓子や酒類の分類に細かく修正が加えられている。基本的に9版以前の分類体系に手を加えないように細分されているが、一方で596.6/.7が名辞も含めてほとんど修正されていないことから、不均衡な改訂といえる。なおかつ両者の境界線は曖昧で、「製法」「料理法」という用語上の区別だけでは不明瞭な部分も少なくない。

デューイ十進分類法 (DDC) ¹⁰⁾では、このような類似する複数の主題での混乱を緩和するために本体にManualを同梱しており、ここでは「○○についての包括的な著作はAに収める。■■という観点から書かれた著作はBに収める。迷った場合は、Aに収める (A, Bは分類番号)」というように、類似する主題や観点到応じて指針を示している。さらにかかわらず「迷った場合 (If in doubt, prefer...)」という定型文で分類作業への指示も与えている。

はからずもこの588と596はNDCに欠けている「分類作業への細かな指針」の必要性を浮き彫りにしている。

3. 9版「解説」に関する考察

NDC9版では、本表編の冒頭に40ページに及ぶ「解説」を設けている¹¹⁾。これは8版以前の「序説」に替わるものであるが、その分量は以前の倍以上になった。また、その内容はかつて日本図書館協会から刊行されていた「NDCのつかい方」¹²⁾「NDC入門」¹³⁾というNDC公式のガイドラインにおける総論部分を取り込んだかたちで、NDC成立の経緯、構成、付与、図書館への適用方法までを解説している。

今回この「解説」を精読することで、いくつかの問題点が明らかになった。

3.1 「解説」という名称

この「解説」はNDCの成立から適用に至るまで一連の流れに沿っているように見える。しかし

通読すると、分類法・NDCの概論(基礎的なもの)と、利用法・指針(館レベル=政策的なもの)、使用法・適用法(館員個人レベル=業務的なもの)が混在し、かつ順序立てて述べられていないことがわかる。

これは前述のとおり、この「解説」が過去のガイドライン(前掲の2冊)を踏襲して書かれていることによるものと推測できる。ガイドラインはいずれも現職図書館員向けに、実務の手法を解説するために書かれたものであるから、図書館実務に対する最低限の知識を持った上で読むことが前提となっている。一方、9版「解説」の「読者」は図書館員に限定されない。

この「解説」は、基礎知識を持たない読者に対するIntroductionに相当する内容と、Manualに相当する内容が混在しているため、参照したい記述の確認が容易でない。

分類法の前文としては、やはり「序説」「利用法」は明確に分けられるべきであり、「解説」という名称それ自体からの再考も必要である。

3.2 専門用語の強調、定義と検索性

NDCに限らず、分類法には独特の用語が登場する。しかしこの「解説」においてはそれぞれが文中において簡潔に述べられているだけで、必要な時に参照が難しく、また同じ書体で書かれているために重要な語か否かの判別も困難である。NDCの「解説」が経験の浅い実務者や初学者を対象にしているのだとすれば、これは不親切といえるだろう。

DDCをはじめ諸外国の分類法には用語集(Glossary)が付されているのが一般的であり、そこでは専門用語の定義がまとめられている。しかしNDCの場合、2冊のガイドラインにはそれぞれ用語集が含まれていたが、9版「解説」には継承されていない。

10版に向けては「文中の専門用語を強調する」「索引を設ける」または「Glossaryを設置する」

など改善を求めたい。

3.3 各分類概説の位置づけ

「解説」の末尾には、付録として「各分類概説」が付されている。これも通読すると類によって構成、精粗、文体が一律でないことがわかる。9類のように詳細に特殊分類規程が書かれているところもあれば、4類、5類のように本表から自明のことしか書かれていない簡潔なものもある。

そもそも各分類概説はNDCが学問分野・領域をどのようにとらえ、区分しているかを示す要素であることからIntroductionと不可分であり、また9類のような特殊分類規程はManualと不可分である。「解説」全体の構成を見直し、各分類の概要と実務の指針が明確に位置づけられる必要がある。

3.4 豊富な実例の必要性

Manualに相当する部分を初学者や実務者にとって有益なものにするためには、各項目の解説に続けて具体例を示す必要がある。特に補助表（とりわけ固有補助表）においてはその効果が大きい。

その場合も単に記号の例を示すだけではなく、記号の成立過程をも示す必要がある。なかでもNDCの初学者が必ず戸惑う「形式区分における0の扱い（省略する場合／重ねて使用する場合）」などは、記号成立過程や複数の付与例などを示すことでより明解になるはずである。

4. 「使いやすいNDC」の実現に向けて

1.4.3で述べたとおり、分科会から分類委員会に対して本稿で述べた点を中心として提言を行った。なお、本稿で触れなかったものに、次のようなものがある。

- ・ 冊子の構成について（「本表編」「一般補助表・関連索引編」ではなく、例えば「本表・補助表編」「解説・関連索引編」のような構成に）
- ・ 文章の定型化・明確化

4.1 誰に対して「使いやすい」のか

NDCの利用者には3つのタイプが考えられる。

まず大多数であろう実務者、特に熟練した図書館員に対しては、明確な分類規程と複雑な主題への対応指針を示すことが求められる（Manualの充実）。

次に、経験の浅い図書館員や初学者に対しては、迷いを生まない実例や指針の提示が必要である（Introductionをも含めた構成の見直し）。

そして、あまりNDCが意識してこなかった「図書館利用者」にとっても今後NDCが重要な役割を果たす可能性がある（例えば検索システムのインターフェースを通じて）。そのためには、関連索引や注参照、例の充実が求められる。

4.2 なにをもって「使いやすい」のか

NDCの機能面から考えれば、もはや拡張や理論的な向上は期待できないといってよい（NDCの改訂方針として「NDCの根幹に関わる体系の変更はしない」¹⁴というのであれば）。それに、十進分類法がもつ根本的な限界（区分肢が9つまでしか設けられない）からすれば、やむを得ざるころもある。

しかし、「分類」と「ラベルの記号」は同一ではない。つまり分類記号と請求記号（図書記号）とを区別して使用することができるということを正しく認識するならば（させることができれば）、分類の改訂に記号桁数を考慮する必要はなくなる。より詳細な階層表現や、これまでNDCが不得手としてきた複合主題の表現などが可能となる。

そして、今後期待されうる検索システムや自動分類などに対応するためには、従来のMRDF（機械可読データ形式）だけでなくSKOSやトピックマップといった「NDCデータの構造化」の検討は不可避である。

資料や文献の提示にとっても「使いやすいNDC」の登場が望まれる。

おわりに

本稿の、あるいは今期の活動テーマに掲げた「使いやすい NDC」という表現は、見る者によっては NDC に対する挑戦的な印象を持つかもしれない。

この「使いやすい NDC」という語は、2009 年 11 月に開催された 10 版試案説明会（中間報告）¹⁵⁾において、改訂進捗状況を報告した金中利和前分類委員会委員長の発言で用いられた表現である。席上、金中氏は「使いやすい NDC を目指していきたい」と述べた。

この表現はきわめて抽象的ではあるが、NDC が向かうべき目標を確かに示しているのは間違いない。よってわれわれは今期、「使いやすい」は具体的に誰にとって、なにをもって達成されるかを検討するためにこのテーマを掲げたのである。

われわれの研究が、NDC10 版あるいはその後の版に有効に活かされることを期待したい。

注および参考文献等

- 1) 藤倉恵一. 日本十進分類法 (NDC) 10 版試案の検証. 私立大学図書館協会会報. 134, p.106-111, 2010.9
- 2) 日本図書館協会分類委員会ホームページ <http://www.jla.or.jp/committees/bunrui/tabid/187/Default.aspx> [アクセス: 2012.2.1]
- 3) 日本図書館協会事務局に照会したところ、14 刷以降の修正は凍結され、13 刷以降の内容に差異がないことを確認した。
- 4) 前掲 1)。また、分類委員会ホームページにおいて審議の記録が公開されている。
- 5) 本稿の著者である藤倉は日本図書館協会分類委員会委員でもあり責任の一翼を担っているが、本稿はあくまで研究分科会としての視点と立場で執筆しており、委員として知り得た非公知の情報について本稿では言及しないことをご承知置きいただきたい。
- 6) 田村由紀子 (文責). 日本十進分類法第 10 版

試案の概要 その 5「哲学」の部. 図書館雑誌. 104(9), p.625-628, 2010.9

- 7) 藤倉恵一 (文責). 日本十進分類法第 10 版試案の概要 その 6「技術」の部. 図書館雑誌. 105(5), p. 296-299, 2011.5
- 8) 田窪直規編. 情報資源組織論. 樹村房, 2011.4 p.76 において、交差分類の実例としてこのことが紹介されている。
- 9) NDC の相関索引では精進料理は 596.21 と指示されているが、国立国会図書館件名標目表 (NDLSH) では代表分類として 596.21 と 596.3 の両方を与えている。
- 10) Mitchell, Joan S [et al]. Dewey decimal classification and relative index. 23rd ed. Dublin, OCLC Online Computer Library Center, 2011, 4v.
- 11) もり・きよし原編. 日本図書館協会分類委員会改訂編集. 日本十進分類法. 新訂 9 版. 日本図書館協会, 1995.8
- 12) もり・きよし編. NDC のつかい方. 日本図書館協会, 1966.4 (シリーズ・図書館の仕事, 9)
- 13) 森清編. NDC 入門. 日本図書館協会, 1982.7 (図書館員選書, 2)
- 14) 金中利和. 日本十進分類法新訂第 10 版の作成について: JLA 分類委員会の改訂方針. 図書館雑誌. 98(4), p.218-219, 2004.4
- 15) 那須雅熙. 「日本十進分類法 (NDC) 新訂 10 版」試案説明会 (中間報告) の概要. 図書館雑誌. Vol.104, No.3, 2010, p.164-165